

古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について

——「天」を中心に——

黄 當 時

〔抄 録〕

古代日本語の船舶の名称やそれに由来する語彙には、日本語一視点のみでは正確に理解できないものがある。これらの単語には、適切な海の民の視点、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識を持てば正確に理解できるものがある。

茂在寅男氏は、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、ハワイ語を用いて簡潔に説明したが、その知見は、言語面からの研究に突破口を開くものであった。

小論では、「天^{アマ}」は、ポリネシア語の「ama」を漢字で書き記したものであり、全称を「天鳥船、天鵠船、天磐船」という船舶の略称であること、「鳥を舶載する、アウトリガー・フロート付き外洋航海船」を意味すること、などを解明することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、中国語やポリネシア語等の外国語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード 天鳥船/天鵠船/天磐船、天岩戸、天の原、天離る、天飛ぶや

1. はじめに

『古今和歌集』406阿倍仲麻呂の

天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも

は、人口に膾炙する歌である。書物には、次のような現代語訳・説明が見える¹⁰¹⁾。

広々とした大空を遠くはるかに見晴らすと、今しも月が上ったところである。思えばま

だ若かった私が唐土に出発する前に、春日の三笠の山の端から上ったのも、今夜の月と同じようなものであった。(『古今和歌集』巻第九 p. 190)

大空を遙かに見渡すと、東の方に今月がさしのぼってくる。ああ月は、以前故郷の奈良にゐた時、春日の三笠山に出た月だのに。仲麻呂が異國にあって、故郷を慕って詠んだ歌。『大辭典』第一巻 pp. 491-492。

天の原は、辞書では次のように説明されている。

あま-の-はら【天原】『名』①(「はら」はひろびろとした平らな所をさす語) 広く大きな空。②天つ神が統治する天上界。高天原。『日本国語大辞典』第二版第一巻 p. 547。

また、ふりさけみる等は、『日本国語大辞典』では次のように説明されている。

ふりさけ・みる【振放見】『他マ上一』遠くを仰ぎ見る。はるかかなたを見上げる。ふりさけあおぐ。(第二版第十一巻 p. 1054)

ふりさけ-あお・ぐ【振放仰】『他ガ四』「ふりさけみる(振放見)」に同じ。(第二版第十一巻 p. 1054)

ふり-さ・く【振放・振仰】『他カ下二』遠くに目をやる。遠くを仰ぎ見る。ふり仰ぐ。(第二版第十一巻 p. 1054)

ふり-あお・ぐ【振仰】『自ガ五(四)』顔を振ってあげる。上を向く。(第二版第十一巻 p. 1048)

『広辞苑』の説明は、以下の通り。

ふり-さ・く【振り放く】『他下二』はるか遠くを仰ぐ。

ふり-さけ・みる【振り放け見る】『他上一』ふり仰いで遠くを見る。ながめ上げる。(第五版 p. 2367)

『大辭典』の説明は、以下の通り。

フリサク 振放く 動下二 遠ざかり隔つ。振り向きて遠くを見る。遙かに仰ぐ。

フリサケアオグ 振放仰ぐ 遠くを仰ぎ見る。手をかざして遙かに仰ぐ。(第二二巻 p. 383)

辞書は、情報解析に必要である。難度が高い解析では、辞書が役に立たない場合があるが、想定外のないようにしなければならない。

現代語訳には「広々とした」が使われているが、原文のどこにそのような意味があり、根拠があって訳しているのだろうか。

科捜研のドラマはフィクションであるが、娯楽とは言え、そのようなものを茶の間で見る今日、私たちもそろそろ解析手法を根本的に見直さねばならないのではないだろうか。

天の原という言葉にはどのような情報が含まれているのであろうか。阿倍仲麻呂は、どのように月を見たのであろうか。文字情報を丹念に解析しつつ解釈を加えていきたい。

私たちは、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性がある。海の経験の乏しい私たちには、この問題について判断する能力や知識が欠けているかも知れないが、私たちの視点を、いわゆる海の民の視点にもう少しでも近づけることができさえすれば、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識は、入手可能ではないだろうか。いわゆる海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになる。小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分な程度の知識を入手しつつ、言語学的視点から天の原の名称の由来を探り、付随する幾つかの問題の解釈も試みていきたい。

2. 先行研究

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、二人の研究者が「枯野」解明の過程で示した知見が有用と思われるので、見ておきたい。

まず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記』『紀』の物語が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたもので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、軽野」（『日本書紀』）が使われたのではないかと推論している²⁰¹⁾。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の実住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった²⁰²⁾。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

次いで、井上夢間氏は²⁰³⁾、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的で重要なことがらを次のように簡潔に説明している²⁰⁴⁾。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一

語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キッチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、
「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、
「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、
「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の解明は、言語学的視点からの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

あまのとりふね あまのはとふね あまのいわふね
3. 天鳥船、天鵠船、天磐船

『日本書紀』には、同じ構造で言及される船が三船ある。

『日本書紀』(神代下、第九段、一書第二)に「またお前が往来して海で遊ぶ備えのために、高橋・浮橋と天鳥船あまのとりふねも造ろう」³⁰¹⁾とあり、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守(1994)は、「天鳥船あまのとりふね」に「ここでは水鳥の船。鳥は他界(海は他界)と往来すると考えられていた」と頭注を付している(p.135)³⁰²⁾。

この頭注は、「天」を解釈することなく、「天鳥」を「水鳥」と解釈しているようである。「海は他界」というのは、陸の民の発想であり、海の民のそれではない。

次に、『日本書紀』(神代下、第九段、正文)に「そこで熊野の諸手船に〔または天鵠船という〕、使者の稲背脛を乗せて遣わし、高皇産霊の勅を事代主神に伝達し、またその返事を尋ねさせた」³⁰³⁾とあり、小島他(1994)は、「天鵠船」に「天上を鳩のように早く飛ぶ意。「鵠」は享和本『新撰字鏡』に「也万波止」。記は天鳥船神を遣わす」と頭注を付している(p.117)³⁰⁴⁾。

鳩ハト(在来種のヤマバト)は、鳥類の中でもさして速く飛ぶわけではない。渡来種のカワラバトを選別し、訓練を施した伝書鳩とは別種であり、飛行速度が速いという比喻に用いるのには、適当ではなかろう。海の民は、実際には、私たちにわからない何か重要な理由で鳩を用いていた可能性がある。解釈者諸氏に限らないが、古来、鳥類についての知識があまりないまま、辻褃合わせ程度の解釈がされてきたのではないだろうか。

さらに、『日本書紀』(神武天皇、即位前紀)に「すると、『東方に美しい国があります。四方を青山が囲んでいます。その中に、天磐船あまのいわふねに乗って飛び降くだった者がおります』と言った」³⁰⁵⁾とあり、小島他(1994)は、「天磐船」に「天上界の磐のように堅固な船」と頭注を付している(p.194)³⁰⁶⁾。

「天」を「天上界」と解釈しているが、この解釈で正しいのだろうか。磐船は、磐(の)船、という意味であり、磐(の)ように堅固な船、という意味ではなかろう。水に浮かばない岩石を、船の堅固さの比喻に用いるのは、第二例の、鳩が速く飛ぶ、以上の不自然さを覚えざるをえない。

以上のように、「天鳥船」「天鵠船」「天磐船」の「天」は、他界、天上(界)と解釈されている。しかし、「天」には、他界や天上(界)以外に、この三船に共通するような意味はないのだろうか。

磐いわは、やや異質なものに見えるものの、鳥や鳩に共通する何らかの意味を持っている可能性がある。

茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記』『紀』の中に古代ポリネシ

ア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げているが、天については、次のように述べている³⁰⁷⁾。

……アマというのは、天、海の両方の意味にとれる、冠語的な形容詞であるといわれてきた。そして『日本書紀』の文脈のなかでは、それもいちおうはうなずける解釈であった。しかしこの場合、「天」という漢字からいったんひきはなして、AMAの発音だけで考えると、つぎのようなポリネシア語の意味が浮かびあがる。

アマ=カヌーのアウトリガーという腕木の先についている浮木^{フロート}。すなわちカヌーのアウトリガーについている縦方向の木。

AMA = Outrigger float; the longitudinal stick of the outrigger of a canoe.³⁰⁸⁾

アウトリガーのフロートというのは、カヌーの転覆をふせぐためにつけられた、かんたんな装置である。カヌー本体の横から何本かの細い腕木を出して、その先に、船型の浮木をつける。浮木の長さは、長いもので本体の八割にまで及ぶこともある。

なお「記紀」に「冠詞」として数多く出てくる天という言葉、なぜこの場合だけアウトリガーと解するのか、という疑問も出るはずである。しかしカエルという言葉がゲコゲコ鳴く動物だけでなく、帰る、変える、の意味を持つこともある。どこの国の言葉にも、いくつか複数の意味をもつ同表音の単語、多義語が多数存在している。

この事情は現代も古代も、さほど変わりが無いであろう。さらにアマノイワフネの場合、とくに海または船に強く結びつく点で、AMA=アウトリガーの浮木説を採用しても無理ではないと思うのだが、いかがだろうか。

^{アマ}天については、茂在氏の推論が成立すると考えてよい。

漢字は、表意機能が極めて強いため、私たちが、漢字の字形が示唆する意味を考慮せずに情報を解析することは、残念ながら、容易ではない。解析結果に不審の念を抱いても、漢字の意味から考えた解釈でいけるはずだ、と一旦思い込んでしまうと、不審の念はいつしか消え失せ、新たな切り口を見つけ、より正確な解析結果に辿り着くチャンスを失ってしまうのである。未知、或いはほとんど未知、の情報を解析する場合には、普段使用しないような装備（知識）も必要であろう。

このケースでも、私たちは、漢字は意味を示している、と考えてしまいがちであるが、この^{アマ}天は、例えば、天^{テン}麩羅や天井の天と同じく³⁰⁹⁾、アマという外来語の音声情報を書き記したものであり、^{あま}天（天空、sky）の意味はない。

次は、鳥、鳩、磐、である。この三者は同類の情報を伝えている可能性がある。

鳥や鴿は、字面の通り、鳥や鴿^{とり はと}と考えられる³¹⁰。一方、「磬」は、現代日本語では鳥の意味を持たないが、鳥、鴿、磬、の三者が同類の情報を伝えているのであれば、「磬」は、イワという名称の鳥、ではないだろうか。

茂在氏は、磬について、次のように述べている³¹¹。

しかし「イワ船」のイワを、文字どおり「岩・石・磬」の意に解釈するには、疑問が最後まで残る。岩の船は水に浮かばないからである。これらの言葉は「いい伝えられた言葉」を、単に文字に表現して記録したもの、つまり「当て字」と考えるべきなのではないだろうか。

したがって問題は、アマノイワフネという表音である。……イワという発音に、何か手がかりはないかどうか。とくにイワが何か船にかかわるとすれば、それが第一歩となるはずである。

私は、あるとすれば、黒潮によって移入した南方系の言語であると考えてきた。したがって、できるだけ古代に近い、古い南方系の諸語^マ属を、いちいちあためてみることにしたのである。

私は、……。

はじめのうちは自分の体験に照らして、東南アジアなどの古語を検索していった。しかし、アマやイワの表音で、船や海の意味にかかわる言葉はなかなかみつからない。ところが、マレー・ポリネシアン語族に入ったとたん、何か目からウロコが落ちるかのように、つぎつぎと適合する表記がみつかったのである。

マレー・ポリネシアン語族というのは、南太平洋地域に広く分布する言語である。アウストロネージア語とも呼ばれ、ニュージーランド語やサモア語、ハワイ語などがふくまれるが、これをひっくりめてポリネシア語と呼んでおこう。地理的には、西はだいたいニューギニア、南はニュージーランド、東はイースター島、北はハワイ諸島という広大な地域である。

現代ハワイ語の辞書のなかに、古代ポリネシア語などの表音が併記されている一冊があった。そのあるページに、めざす言葉があった。イワ 'IWA がみつかったのである。そしてその意味は、軍艦鳥であった。

'IWA=Frigate or man-of-war bird.

イワ=軍艦鳥。これは単なる偶然だろうか。鳥はむかしから、航海に欠かせない動物であった。そのなかでもとくに軍艦鳥は、「航海の案内鳥」として、むかしからポリネシア人によって、南方で利用されていた鳥である。

この鳥は、巢を島の木の上にする性質がある。朝早く島を飛び立って、夕刻に島へ帰り、昼の間は長時間海の上を飛びつづける性質をもっている。このため、朝夕の飛行方向から、島の存在を船乗り知らせてくれるのである。主として熱帯の海に住み、カツオドリなどの海鳥から食物をまきあげる習性がある。黒色、翼が長く、片羽約五十センチ。全体としては日本の鵜によく似ている。

もしイワフネを「軍艦鳥の船」と解するならば、「軍艦鳥によって方向を定める船」の意味になるだろう。『古事記』のイワフネ、『日本書紀』のイワクスブネのイワは、こう考えると、きちんと船に符合する言葉である。

鳥をもちいた航海術は、古代から広く行なわれていた。日本においては、軍艦鳥の役割はカラスなどにかえられた。陸が見えないほど遠い沖に船が出てしまった場合、カラスなどを放してやって、それが飛んで行く方向、すなわち陸地の方向をみつけ出したのだと考えられている。

ここで問題となるのは、イワをハワイ語の 'IWA にそのままおきかえていいかどうかである。かりにイワを「正確」にローマ字で表にするとすれば IWA となる。この IWA と 'IWA とは、完全に同じ発音ではないのである。

IWA の前に ' がついていても、日本語で書けばイワとしか書けないのだが、専門的にはこのイは声門閉鎖音がともなう「イ」である。これをさらに古代ポリネシア語にまでさかのぼると、KIWA つまりキワという発音になる。だから、イワフネではなくて、キワフネでなければならない、という議論が生ずるのである。

しかしキワがイワに変わったのは何世紀ごろか、また、たとえ「記紀」以前にキワだったとしても、当時の倭人にはイワとしか聞きとれなかったのではないか、などの問題提起をし……。

茂在氏は、問題提起、と控え目な表現をしているが、その推論は、言語面からの研究に突破口を開く画期的なものであった。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明にとって極めて重要な手掛かりなのである。

こうして、天鳥船、天鵠船、天磐船、が「アウトリガー・フロートをつけ、陸地や島の方向を確認するための鳥を舶載する船舶」という意味であることがわかった。

情報には、一般に、目で受容するもの（以下、視覚情報）と耳で受容するもの（以下、音声情報）の二種がある³¹²。時空を越えた情報の伝達には、電話やテープレコーダ等がない時代にあつては、視覚情報を使うしかないが、視覚情報は、さらに、文字情報と非文字情報（図像や造形など）に大きく分けられ、文字がなかった頃は、非文字情報が利用された。

唐古・鍵遺跡（奈良県磯城郡田原本町）の弥生土器の線刻舟の前方には鳥が描かれている。

ひがしとのづか
東殿塚古墳 (奈良県天理市) の円筒埴輪には、三隻の大型船の線刻画が描かれ、2号船は、
舳先に鳥が描かれている。めづらしづか
珍敷塚古墳 (福岡県うきは市) の壁画には、舳先に鳥が大きく描か
れている。

古代の日本において、一部の情報は、非文字情報と音声情報の二種の媒体で伝達されている。このケースで言えば、人々は鳥を船に乗せて航海した、という情報が、土器や壁画に彫られた非文字情報と、語部によって代々引き継がれ、後に『記』『紀』などの文字情報に変換された音声情報に共通して保存されているのである。

4. 天の原

冒頭に引用した歌で、阿倍仲麻呂は、「三笠の山に出でし月」と詠んでいる。「三笠の山」が奈良県の春日大社の東側にある御蓋山であるとすれば、標高は、283メートルである。283メートルの山の端に出た月を、果たして、仰ぎ見たり、見上げたりするものだろうか。仲麻呂の見た月は、今しも山の端に出たばかり。見上げるほどの上空にあったと考えることはできない。諸氏は、恐らくこのように考え、先人の研究成果をも見ながら、冒頭に引用したように理解し訳したのであろうが、辞書の説明は、無視するほどの根拠や情報がない場合、一応検討しておきたいものである。

冒頭で挙げた辞書の説明には、三タイプあった。辞書三点に収録された八語から、〇〇あおぐ、の二語を除いた六語の説明11例の内9例が、仰ぐ、〇〇上げる、と説明している (Aタイプ)。後は、遠くに目をやる、が1例 (Bタイプ)、振り向きて遠くを見る、が1例である (Cタイプ)。

情報解析では、恣意的に解析対象を選択/排除してはいけない。対象を公平/平等に扱わない場合、きちんとした根拠が必要である。順当さから言えば、9例あるAタイプの解析から始めるべきであるが、実際には、阿倍仲麻呂の見た月は、どのタイプであれ、位置 (高度) は同じであり、冒頭に挙げた説明や訳がBタイプを採用しているということもあり、A、B両タイプを同時に解析したい。

考察の便宜上、取り敢えず、Aタイプの、仰ぐ、〇〇上げる、という動作を、大雑把に45°上方向への視線や顔面の移動、Bタイプの、遠くに目をやる、という動作を、大雑把に22.5°上方向への視線や顔面の移動、と仮定しておく。また、Cタイプの、振り向きて遠くを見る、という動作を、大雑把に90°左/右方向への視線や顔面の移動 (A、B両タイプ同様、腰や肩は固定し動かさない)、と仮定しておく。

さて、Aタイプは、仰ぐ、〇〇上げる、という動作である。阿倍仲麻呂は、この動作で「天の原」を視認後、視線や顔面を大雑把に45°上方に向けて月を見たのである。

そして、Bタイプは、遠くに目をやる、という動作である。阿倍仲麻呂は、この動作で「天

の原」を視認後、視線や顔面を大雑把に22.5°上方に向けて月を見たのである。

阿倍仲麻呂の見た月は、どのタイプであれ、位置（高度）は同じである。これらの情報が意味することは、阿倍仲麻呂は、Aタイプなら、大雑把に俯角22.5°で「天の原」を見、次いで、大雑把に仰角22.5°で月を見たこと、Bタイプなら、（目の高さの）水平面の方向に「天の原」を見、次いで、大雑把に仰角22.5°で月を見た、ということである。

重複するが、大事なことなので以下のことを再度述べておきたい。

漢字は、表意機能が極めて強いため、私たちが、漢字の字形が示唆する意味を考慮せずに情報を解析することは、残念ながら、容易ではない。解析結果に不審の念を抱いても、漢字の意味から考えた解釈でいけるはずだ、と一旦思い込んでしまうと、不審の念はいつしか消え失せ、新たな切り口を見つけ、より正確な解析結果に辿り着くチャンスを失ってしまうのである。

大雑把に俯角22.5°で見る「天の原」は、天空（sky）ではない「天の原」だ、ということに気付くが、実は、この情報（天空ではない天の原）は、情報解析をしなくても気付くことができた情報であった。

目の前に天の原を見た後に、上を向こうが（Aタイプ）、遠くに目をやろうが（Bタイプ）、振り返ろうが（Cタイプ）、目に入るのは、常に天の原である。「天の原」を見た後で月を見た、という事物の提示の仕方は、阿倍仲麻呂が見た「天の原」は天空（sky）の天の原ではなく未詳だが何か別物の「天の原」ではないか、ということを私たちに気付かせていた。

では、仰がなくても見ることのできる「天の原」とは何であろうか。それは、（遠く離れた）大空ではない、何か別のものではないのだろうか。

『古今和歌集』406の天は、^{アマ}天鳥船、^{アマ}天鵠船、^{アマ}天磐船の天である。「ホットコーヒー」や「パトロールカー」の略称（それぞれ、ホットやパトカー）が示唆するように、日本語は、古今を問わず、省略表現を好む言語なのである⁴⁰¹。

古代において「^{アマ}天鳥船、^{アマ}天鵠船、^{アマ}天磐船」も略称の^{アマ}天が日常的に使われていたと見てよい。

「天の原」は、従来、（遠く離れた）大空、と解釈されてきた。しかし、実は、^{アマ}天鳥船、^{アマ}天鵠船、^{アマ}天磐船が水面一面に浮かんでいる⁴⁰²、の意なのである。

A、B両タイプの訳は、それぞれ以下のようなものであろう。

眼下は天の原（水面一面の船）。見上げると、今しも三笠の山の端から出たばかりの月である。

眼前は天の原（水面一面の船）。遠くに目をやると、今しも三笠の山の端から出たばかりの月である。

Cタイプの意味は、立っていた場所が高所か低所かにより、二つの可能性があるが、以下のようなものであろう。

眼下は天の原（水面一面の船）。横を見ると、今しも三笠の山の端から出たばかりの月である。（大雑把に俯角22.5°で天の原を見た後、横方向に見上げると、大雑把に仰角22.5°で月が

見えた。C aタイプ)

眼前は天の原(水面一面の船)。横を見ると、今しも三笠の山の端から出たばかりの月である。(目の高さの水平面の方向に天の原を見た後、横方向の遠くの方に、大雑把に仰角22.5°で月が見えた。C bタイプ)

辞書にあるA、B、C三タイプの説明とも、阿倍仲麻呂の歌を説明できることがわかった。当時の状況を撮影した写真やビデオ等が入手できない限り、良識ある解析ではこれ以上絞り込むことはできない⁴⁰³⁾。

「天」が天鳥船、天鶴船、天磐船の略称であるとわかれば、「天」が登場する幾つかの歌の真意もはっきりと見えよう。

歌が詠まれた頃、「天」が「天鳥船、天鶴船、天磐船」の略称の一つであることは常識であったが⁴⁰⁴⁾、この常識は、その後何故か早い段階で急速に失われ、後人には、理解ができなくなってしまった。

『万葉集』147に次のような歌がある。

天皇聖躬^{おほみみ やくき}1 不予^{おほきさき}みましし時に大后^{おほきさき}2の奉れる御歌一首
 天の原^{あま}3 振り^ふ放^きけ^き4 見れば大君^{おほきみ}の御^み寿^{いのち}は長く天^{あまた}足^{あまた}らし^{あまた}5たり
 一書に曰はく、近江^{あふみのすめらみこと}天^{あふみのすめらみこと}皇^{あふみのすめらみこと}1の聖^{あふみのすめらみこと}躰^{あふみのすめらみこと}不予^{あふみのすめらみこと}御^{あふみのすめらみこと}病^{あふみのすめらみこと}急^{あふみのすめらみこと}かなりし時に、大后^{あふみのすめらみこと}の奉^{あふみのすめらみこと}献^{あふみのすめらみこと}れる御^{あふみのすめらみこと}歌^{あふみのすめらみこと}一首^{あふみのすめらみこと}

中西進1978は、「1天子の病をいう。「予」は安・和。天智十年(六七一)九月不予、十月弥留(いよいよおも)く、十二月三日崩。2倭大后。3国原・海原の類。ハラは広がり。4目を遠くへやって。→一七。5「足る」の敬語。天皇を天・足ラシで讃えるのは当時の慣習。……○平癒を祈る呪歌。以下大後の作は多く詞人の代作か」と語句に注を付し、「広々とした空を遠く見ると、大君の御命は長く天空に充足しているよ」と口語訳している(p. 123)。原文は、天原 振放見者 大王乃 御壽者長久 天足有。(同書同頁)

天空は、生命や魂魄が飛翔する空間ではあっても、生命や魂魄が充足する空間ではない。このことは、古代人も知っている。大后が空を遠く見たところで、大君の命が長く天空に充足しているのは見えなかったであろうし、大后はそのような意味でこの歌を詠んだのではなからう。

何とも散漫で締めりのない口語訳は、歌に起因しているのではなく、歌(にある言葉)の意味がわからないまま、辻褃合わせ程度の訳をするしかなかったことに起因しているように見受けられるが、如何であろうか。

大後の歌の意味は、おおよそ次のようなものであろう。振り放け見れば、は上で検討した通り、大後の立っていた場所が高所か低所か等が不明であるため、A、B、C三タイプとも可能

性があるが、一例として、C aタイプで訳しておく。

眼下は天^{アマ}の原（水面一面の船）です。横の方を見ましたら（天足が停泊しているのが目に入り）大君にはいつつまでもお元気でいていただきたいと祈らずにはられません。天足（ama-taurua、アウトリガー付き双胴船）が（ご乗船をお待ちして）停泊しているのですよ⁴⁰⁵⁾。

5. 天離る・天飛ぶや

5-1. 天離る

『万葉集』29に次のような歌がある。

近江の荒れたる都¹を過ぎし時²に、柿^{かき}本朝臣^{もの}人麿^{あそみ}の作れる歌
…… 天離^{あまざか}る¹⁴ 夷^{ひな}にはあれど 石走^{いはばし}る¹⁵ 淡海^{あふみ}の国の 楽浪^{ききなみ}¹⁶の 大津の宮に ……

中西進1978は、「1 近江大津宮。アフミは淡（あ）海の意。滋賀県大津市。天智六年（六六七）遷都、天武元年（六七二）、壬申の乱により、廃墟となる。2 年次未詳。次の黒人の歌、人麿の二六四、二六六と同時か。……14 「夷」の接続表現。15 岩の上をほとばしる水の形容。16 楽浪郡」と語句に注を付し、「……天道遙かな田舎ではあるが、岩ばしる近江の国の楽浪の地の大津の宮に……」と口語訳している（p. 63）。原文は、…… 天離 夷者雖有 石走 淡海國乃 楽浪乃 大津宮余 ……。(同書 p. 64)

中西進1978は、天道遙かな、と意味不明の口語訳をしている。

中西氏は、前人の諸説を参照したであろうが、恐らく、それらを適切に処理する知識がなく、結果として、合理性や整合性を欠く解釈になったものと思われる。間違いではあるが、都から遠い、とした方がまだましであった。

天は、既に説明した通り、天鳥船^{アマ}、天鵠船^{アマ}、天磐船^{アマ}の略称の天^{アマ}である。天離る、とは天^{アマ}が出る、天^{アマ}が出航する、天^{アマ}が遠ざかっていく、という意味である。

引用箇所が「天^{アマ}が遠ざかっていく。（ここは）辺鄙な所ではあるが、岩^{イワ}が走っている⁵¹¹⁾。近江の国の楽浪の地の大津の宮に……」という意味であることは、理解できるのではないだろうか。

『万葉集』227の歌も見よう。

或る本の歌に曰く

あまざか ひな あらの
天離る¹夷の²荒野に³君を置きて⁴思ひつつあれば生けりともなし

中西進1978は、「1→29。2→29。3→47。4 放置して。以下の句すべて212に類似」と語句に注を付し、「天路も遠い夷の荒野にあなたをおいて、恋いつづけていると生きた心地もない」と口語訳している (p. 160)。原文は、天離 夷之荒野亦 君乎置而 念乍有者 生刀毛無。(同書 p. 160)

天路や『万葉集』29の訳で使われた天道は、天上にあるという道、天へ昇って行く道、の意であり、この歌とは何ら関係がない。

歌人は、乗ることもままならず、^{アマ}天がゆっくりと遠ざかるのを見送るしかなかった、万感こもごも到り、心は千々に乱れる、そのやるせなさを、歌の出だしで、天離る、の一句に読み込んだのである。そして、人々は、この一句五音節で歌人の心情を理解したのであった。

歌の意味は、次のようなものであろう。

^{アマ}天が遠ざかっていく。(あの天に乗りたい。乗れば貴方に会えるあの天に乗りたい) 辺鄙な所の(それも) 荒野にいる貴方に恋焦がれ、貴方のことが心配でたまらないのだ。

『万葉集』4019に次のような歌がある。

あまざか ひな しる
天離る鄙とも著く¹ここたくも²繁き恋かも³和ぐる日も無く

中西進1983は、「1 「天路を遠ざかったいなか」という慣用表現に実感を得た。「著く」は「…というものはっきりと」。2 程度が大きいこと」と語句に注を付し、「空の彼方の鄙というとおりに、たしかに、こんなにも絶えず都が恋しいものか。心休まる日もなく」と口語訳している (p. 135)。原文は、安麻射可流 比奈等毛之流久 許己太久母 之氣伎孤悲可毛 奈具流日毛奈久。(同書同頁)

高木市之助・五味智英・大野晋1962は、「鄙とも著く一都から離れた田舎であるとはっきり分るように。○ここたくも一こんなにはなはだしく。○和ぐる日一静まる日」と頭注を付し、〔大意〕を「遠い田舎にいるとはっきり分るように、こんなにもひどく妻が恋しいことだ。その気持の静まる日もなく」としている。『萬葉集四 日本古典文学体系7』岩波書店。p. 243。

天離る、を、遠い、とやや遠慮がちにごまかしている訳である。

小島憲之、木下正俊、佐竹昭広1975は、「鄙とも著く—シルシは、はっきりしている、明瞭である、その甲斐がある、などの意の形容詞。ここは、～であるのももっともだ、の意。○和ぐる一心が静まる」と頭注を付し、「(天離る) 鄙であるだけに こんなにも つのる恋であることか 休まる日もなく」と現代語訳している。『萬葉集四 日本古典文学全集5』小学館。p. 227。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996は、「鄙とも著く—鄙は畿外の地。シルシは、顕著である、明らかである、の意。越中が辺鄙^{ひん}の地であるというのも道理で。○和ぐる一心が安らぐ」と頭注を付し、「(天離る) 鄙だけのことはあって これほどに 恋もつることか 休まる日とてなく」と現代語訳している。(p. 219)

小島憲之、木下正俊、佐竹昭広1975、小島憲之、木下正俊、東野治之1996ともに、天離る、に相当する個所は、括弧に入れて(天離る)とし、訳していない。

枕詞にさして意味はないが、直後の鄙にかかっている、と考えれば、高木市之助・五味智英・大野晋1962の頭注(都から離れた)や大意(遠い)のように訳せたであろう。小島憲之、木下正俊、佐竹昭広1975が、括弧に入れて(天離る)としたのは、枕詞には音節消化の機能しかなく意味がないから訳す必要はない、という立場か、枕詞という説明に乗せられて追究を放棄したくないがさりとて今は訳せないの他人とは違う立場にいることを取り敢えず示しているのであろうか。

権威者にわからないことがあっても構わないのだが、それが許されない風土では、それを糊塗するために権威者は何かしなければならなかったのであろう。日本の古典の解釈で時折使われる、いわゆる枕詞という概念は、かつて苦境に立たされた権威者が編み出した、自己の権威を守り質問者の質問を封じる機制である疑いが排除できない。後に続く権威者もそれを使うことの利便さが甚く気に入る手放せなくなったことであろう。

佐竹昭広、山田英雄、工藤力男、大谷雅夫、山崎福之2003は、「▽第二句の「鄙とも著く」は、恋の思いがしきりで休まらないことから、ここが思う人のいない田舎であることが実感されるという表現。越中の鄙住まいに恋が多いこと、家持は後にも「鄙にし住めば我恋ひにけり」(4121)、「天離る鄙にしあれば…うつせみは物思ひ繁し」(4189)と繰り返して詠った。「ここだ」は、こんなにも強く。既出(611・924・2553など)」と脚注を付し(pp. 170-171)、「(天離る) 鄙の地であることが明らかであるように、なんともしきりに起こる恋の思いだ。和らぐ日もなくて」と口語訳している(p. 170)。『萬葉集四 新日本古典文学大系4』岩波書店。

現代語訳は、小島憲之、木下正俊、佐竹昭広1975、小島憲之、木下正俊、東野治之1996同様、天離る、に相当する個所は、括弧に入れて（天離る）とし、訳していない。

五書の現代語訳は、次の通りである（出版年順）。

遠い田舎にいるとはっきり分るように、こんなにもひどく妻が恋しいことだ。その気持の静まる日もなく（1962）

（天離る）鄙であるだけに こんなにも つのる恋であることか 休まる日もなく（1975）
空の彼方の鄙というとおりに、たしかに、こんなにも絶えず都が恋しいものか。心休まる日もなく（1983）

（天離る）鄙だけのことはあって これほどに 恋もつものことか 休まる日とてなく（1996）

（天離る）鄙の地であることが明らかであるように、なんともしきりに起こる恋の思いだ。和らぐ日もなくて（2003）

『万葉集』4019について、五書の口語訳を見てきたが、如何であろうか。中西氏の、都が恋しい、という理解はとんでもない間違いだが、氏の気持ちもわからない訳ではない。中西氏は、初句の重みを重視し訳に反映させたかったのであろう。訳者としては当たり前の発想であり、何ら問題はなかったが、中西氏が、初句（天離る）を、諸氏と五十歩百歩の、空の彼方の、と理解したことがこの悲劇の訳を生んでしまった。

中西氏が重要視したであろう初句の重みは、他書では、どのようになっているのであろうか。

三書は、初句（天離る）を（天離る）としており、わからないがわからないと言いたくないので免罪符を使用した、ということがわかる。

高木市之助・五味智英・大野晋1962は、遠い、と現代語訳しているが、五音節（アマザカル）を三音節（トオイ）にしており、訳したうちに入らないような訳である。中西氏が重要視した初句の重みも何もあったものではない。

もうそろそろおわかりであろうが、『万葉集』4019（天離る鄙とも著くここだくも繁き恋かも和ぐる日も無く）の意味は次の通りである。この初句の重みを重視した訳を試みた中西氏には、筆者よりもずっと綺麗な訳ができるのではないだろうか。

天^{アマ}が遠ざかっていく。（あの天^{アマ}に乗りたい。乗れば貴女に会えるあの天^{アマ}に乗りたい）（ここが）辺鄙な所であることは確かだ、こんなにも貴女が恋しくなるとは、どの日も落ち着かないんだよ。

あの天^{アマ}に乗れば、恋人の元に行ける、恋人に会える。その気持ちを殺して、天^{アマ}を見送る自分。

どうしようもない無力感、寂寥感、やるせなさを、たった一言、天が遠ざかっていく、船が出ていく、の一句に詠み込んだ歌人の目は潤んでいたであろう。

人は、都に恋をしても恋焦がれることはない。人は、人に恋し恋焦がれるのである。天離る、という文字情報には、都の意味は微塵もなく、都から遠いとか近いとかにも全く言及していないのである。

5-2. 天飛ぶや

天飛ぶや、で詠まれる歌は、5首あるが、天を詠んだと考えられるものが2首ある。

先ず『万葉集』207の歌を見てみたい。

天飛ぶや^{あまと} 軽の路は^{かる みち} 吾妹子が^{わがも こ} 里にしあれば^{さと} ねもころに^ほ 見まく欲しけ^ほど……

中西進1978は、「2雁（かり）と同音の「軽」に連続。3藤原京西端の大路が軽に到り、ここに市が開かれた。路は主としてその地点をさす。奈良県橿原市。4ねんごろに。5「欲しけ」は形容詞已然形。→164」と語句に注を付し、「空を飛ぶよ、軽の地はわが妻の住む里なので、よくよく見たいのだが……」と口語訳している。(pp. 149-150) 原文は、天飛也 軽路者 吾妹兒 之里尔思有者 懃 欲見騰。(同書 p. 150)

意味は、次のようなものであろう。

天が飛ぶように走っていますね。軽の道は、私の……

古典に枯野や軽野が登場するが、軽野から後置修飾語の野を取った語形が軽である。先に（2. 先行研究）、井上夢間氏の解明は、言語学的視点からの研究に突破口を開くものであった、と述べたが、ご記憶であろうか。

宣教師が太平洋諸語に文字表記を持ち込んでから、ローマ字で kau-lua と表記されるようになった単語は、古代日本においては漢字一文字で、軽（時に枯、唐）、と書き記されていた（その二文字形式は、加良、訶羅）。kau-lua とは、船-二つ、双胴船、のことであり、軽、もちろん双胴船の意である。同様に、ローマ字で kau-lua-nui と表記されるようになった単語は、古代日本では、漢字で、加良奴、加良怒、訶羅怒（二文字形式は、枯野、軽野）と書き記されていた。kau-lua-nui とは、船-二つ-大きい、大型の双胴船、のことである（2. 先行研究参照）。

次に『万葉集』2656の歌である。

あま と やしろ いはひつき こもりづま
天飛ぶや、¹軽の社の²、³齋槻幾世まであらむ。⁴隠妻、⁵そも

中西進1981は、「1天飛ぶ雁（かり）一軽と音を連続。→207。2 けがれを忌んで大切に
する槻。3 このままで。4 人に告げぬ妻。→2566」と語句に注を付し、「天に飛ぶよ、軽の社に
まつる槻の下にいつまでも隠しておかねばならない隠妻だろう」と口語訳している。（p. 68）
原文は、天飛也 軽乃社之 齋槻 幾世及将有 隠孀其毛（同書同頁）作者未詳。

中西氏は、「天飛ぶ雁（かり）一軽と音を連続。→207」とするが、カルとカリは、果たして
連続していると言えるのだろうか。中西氏は、意味が取れない場合に、この手法（AはBと音
を連続）を取るようである。このケースでも、軽（カル、かる）、の意味がわからないから、
雁（カリ、かり）に持ち込むことで何とか片付けたかったのであろうが、これでは、歌人が、
軽/カル/かる、で情報を伝えようとしているにも関わらず、私たち読者は、歌人の意図を誤解
させられてしまうことになる。情報解析では、軽々に言い換えることをしてはいけないのであ
る。

また、中西（1981）は、「天飛ぶ雁（かり）一軽と音を連続。→207」と注釈するのであれば、
歌の解釈を、注釈そっちのけで、軽とするのではなく、きちんとけじめをつけて、雁と解釈し
雁と訳すべきであったように思われる。

古典の解析には、通常の言語の知識以上のもの、具体的には、海の民の言語や文化に対する
知識がある程度必要な場合がある。

『日本国語大辞典』第二版第三巻に次のような説明がある。

かる【軽】奈良県橿原市大軽付近、畝傍山の南ふもと一帯をいった。懿徳（いとく）・
孝元・応神の三天皇が都を置いた所とされる。*古事記（712）-中「大倭日子鉏友命（お
ほやまとひこすきとものみこと）軽（かる）の境岡宮に坐しまして、天の下治らしめし
き」*書紀-懿徳二年正月（北野本南北朝期訓）「都（みやこ）を軽（カル）の地（とこ
ろ）に遷（うつす）。是（これ）を曲峽（かかりを）の宮（みや）と謂（い）ふ」と説明
する。p. 1134。

また、関連する語句は、次のように説明されている。

かる-の-いけ【軽池】奈良県橿原市大軽付近にあった池。*万葉（8C後）-三・
390「軽池（かるのいけ）の浦廻（うらみ）行き廻る鴨すらに玉藻の上に独り寝なくに
〈紀皇女〉」p. 1142。

かる-の-おおいらつめ：おほいらつめ【軽大郎女】記紀で、允恭（いんぎょう）天皇の

皇女。同母兄軽皇子（かるのみこ）との不倫の恋が発覚し、「古事記」では伊予の湯に流された軽皇子を追って死んだと伝えられ、「日本書紀」では伊予に流されたと伝えられている。衣通王（そとおりのみこ）。p. 1142。

かるの-じんじゃ【軽野神社】滋賀県愛知（えち）郡秦荘町にある神社。旧県社。開化天皇の第三皇子、袁邪本王（おざほのみこと）に、日子坐王（ひこいますのみこ）を配祀（はいし）。垂仁天皇の頃の創建と伝える。堅井（かたい）之大宮。p. 1142。

かるの-のみこ【軽皇子・軽王】①允恭（いんぎょう）天皇の皇子。同母妹の軽大郎女（かるのおおいらつめ）との不倫の恋が発覚して、「古事記」では伊予の湯に流されたあと、妹とともに自殺したとされ、「日本書紀」では穴穂命（あなほのみこと＝安康天皇）に囲まれて自殺したと伝えられている。木梨軽皇子（きなしのかるのみこ）。②⇒こうとくてんのう（孝徳天皇）。③⇒もんむてんのう（文武天皇）。p. 1142。

原文（天飛也 軽乃社之 齋槻 幾世及将有 隠孀其毛）の文字情報を解析する限りでは、初句（天飛也）は、文法構造上、天に飛ぶよ、ではなく、天が飛ぶよ、とすべきであった。中西氏は、文法構造が見えていない訳ではないだろうし、おかしいことに気付いていない訳ではないだろうが、^{あま}天（天空、sky）が飛ぶことはないから、^{あま}天（天空、sky）が飛ぶ、と訳す訳にもいかず、ご覧のような解釈や訳を施したのであろう。

天を^{あま}天（天空、sky）と理解してはいけないのではないかと考える頭の柔らかさがなかったのは気の毒であった。

葡萄果汁は理解できるが、ブドウジュースやグレープジュースは正確に理解できないようなものである。どの言語も、一層ではなく多層である。過去においても、異文化の層や外来語のない言語はない⁵²¹）。中西氏は、このような事実があることを知らなかったのであろう。

天離る、と、天飛ぶや、は^{アマ}天の動きが、歌人から離れる方向なのか、無関係なのか、を除き、意味に違いはない。同じ名称を持つ船舶の航行速度は、同じ、と見ておくが、歌人たちがその速度に頓着しなかった場合は、離る、が使われ、速い、と感じた場合は、飛ぶ、が使われた。天飛ぶやは、少し高速で走っている、と理解しておく。また、軽、とはkau-lua（船-二つ、双胴船）のことであるが、軽の社は、取り敢えず、京都府宮津市にある籠神社のような、軽を祭る社、としておく⁵²²）。

歌の意味は、次のようなものであろう。

^{アマ}天が飛ぶように走っていく。^{カル}軽の社にまつる槻のようにいつまでも隠しておかねばならない隠妻なのでしょうか。人目に触れることのない。

次に、『古事記』82の歌を見てみよう。

¹⁰天廻む ¹¹軽の嬢子 ¹²甚泣かば 人知りぬべし ¹³波佐の山の 鳩の 下泣きに泣く

山口佳紀、神野志隆光 (1997) は、「10「あまだむ」は「軽」の枕詞。天をかけめぐる意で「かり(雁)」と類音の「かる(軽)」にかかる。「天飛^{あま}と^とぶ」から転じて「天だむ」となったとする説があるが、音変化としては考えにくい。11「軽の嬢子」は軽太郎女で、「甚泣かば人知りぬべし」をはさんで「下泣きに泣く」の主格となる。12「甚泣かば 人知りぬべし」は挿入句。……」と頭注を付し、「〈あまだむ〉^{かる}軽の乙女は、ひどく泣けば人にわかってしまうだろう、波佐の山の鳩のように声を忍ばせて泣いている」と現代語訳をしている。(同書 pp. 322-323) 原文は、阿麻陀牟 加流乃袁登売 伊多那加婆 比登斯理奴倍志 波佐能夜麻能 波斗能 斯多那岐爾那久。(同書 p. 322)

『大辞典』に次のような説明がある。(p. 478)

アマダム 天飛む **枕詞** だむはとぶの音通。天を飛ぶの義。天飛ぶに同じ。記・下「天飛む^{おとめ}軽の嬢子、^{いた}甚泣かば人知りぬべし」

天飛ぶ、では、意味が良くわからない。「天を飛ぶの義。天飛ぶに同じ」との説明を見ることで、解説者にもわかっていないことがわかる。また、枕詞とは、説明できない場合に使う免罪符のような機制である可能性があり、枕詞と説明することで、わかっていない、ということが示されている。

天が飛ぶの義、天飛ぶに同じ、が正しい説明であるが、もうそろそろ意味の説明はしなくてもよからう。

アマダムは、上で見た、天飛ぶやの四音節タイプであり、意味も同じである。

軽、は上述の通り kau-lua (船-二つ、双胴船) のことである。人々は、軽のことが全くわかっていないように見受けられるが、ここでは、取り敢えず、kau-lua (船-二つ、双胴船) を管理する官僚一家/一族、としておく。『日本国語大辞典』〔縮刷版〕第三巻 p. 248は、かるベ【軽部】 姓氏の一つ、とだけ説明するが、あまりわかっていない可能性が高いようである。今風に言えば、国土交通省 (の大臣一族)、船舶部 (の部長一家)、というような立場の人々である。

歌の意味は、おおよそ次のようなものであろう。

アマ 天が飛ぶように走っていく。^{かる}軽の乙女よ。ひどく泣いたら、人が知ってしまいます。波佐の山の鳩のように、忍んで泣きなさい。

『古事記』にある、捕らえられ伊予に船で流される木梨軽太子と、その同母妹であり、禁じられた近親相姦の恋人である軽大郎女との歌物語である。

同母兄妹であり、ともに「軽」の名を持つことから、二人は舶泊を管轄する「軽部」の氏族の関係者であろうか。或いは、母方（皇后、忍坂大中姫）も船舶に関係の深い一族であったのかも知れない。

6. おわりに

冒頭で（1. はじめに）、私たちを含め、後世の人々は、自分が想像するほど海の民のことを知らない可能性がある、と述べたが、実際のところ、私たちは、無知とも言えるほどに海の民のことを知らない。

私たちを含め、後世の人々は、海の民の言語や文化についての知識を継承しなかったため、天の原の意味を正確に取ることができない。適切な海の民の言語や文化についての知識を欠いたままでは、当然ながら、海の民の言語や文化を適切に理解したり説明することができないのである。

私たちは、新たに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識、という装備を持つことで、先人が持たなかった視点を持ち、先人が理解できなかったことが理解できるようになった。逆に言えば、仮に、私たちに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識がなければ、先人と似たようなこと、言い換えれば、第三者からは、牽強付会、と思われかねないようなことしか書けなかったものと思われる。今日の日本語の中に異文化の語彙（外来語）が存在するように、古代の日本語の中にも異文化の語彙（外来語）が存在することが、おわかりいただけたであろう。どの言語にも共通するが、日本語も、一層ではなく、多層なのである。海の民の言語や文化は、日本の言語や文化の基層の一部なのである。古代の日本社会には多様な言語や文化があったこと、即ち、古代の日本社会における言語や文化の多層性は、是非とも視野に入れておきたいものである。

海の民の視点、具体的には、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を加えることで、古典の理解や解釈が、より正確に、より豊かになる。私たちは、古代の日本語に取り組むのに、いわゆる日本語の知識にせいぜい中国語や朝鮮語の知識を加えただけのような姿勢でやってきたが、ポリネシア語が解析/研究上考慮すべき言語であることを否定できないことがはっきりしたのである。外来語は想定外だった、と恣意的に無責任なことを言うのは、やめておきたいものである。

小論では、先達の知見を手掛かりに、さらに、海の民が用いたであろう言語や文化の知識を入手することで、私たちの視点を海の民の視点に少しでも近づけ、「天の原」は、「天^{アマ}の原」の意味構造であること、「天^{アマ}」は、ポリネシア語の「ama」を漢字で書き記したものであり「ア

ウトリガー」を意味するが、全称を「天鳥船、天鴿船、天磐船」という船舶の略称であること、「鳥を舶載する、アウトリガー・フロート付き外洋航海船」を意味すること、などを解明することができた。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙(外来語)という視点を加えることで幾つかの問題を解くことができた。古代の日本語の問題をより正確に解いたり、古典をより正確に理解するのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

〔注〕

101) 小沢正夫1971。

201) 『古事記』(下巻、仁徳天皇)の原文表記は、加良奴(荻原浅男、鴻巣隼雄1973.p.289)、加良怒(山口佳紀、神野志隆光1997.p.304)。

202) 茂在寅男1984。p.32。

「枯野」等の解釈に外来語(異文化の語彙)という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。

203) 筆名。本名、政行。

204) これは、管見に入った最も有用な知見である。井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoeと説明しているが、自身のHP(夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>)では、kau = canoeとしている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p.135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p.137)の例があるので、kauをcanoeと理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。

引用文は、KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>。Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.に掲載されていたが、今は削除されている。

301) 小島他(1994)の口語訳(p.135)。

302) 『日本国語大辞典』は、「天鳥船」を「(「天の」は美称)鳥が飛ぶように速く走る船。あめの鳥船」と説明している(第一巻p.543)。

303) 小島他(1994)の口語訳(pp.117-118)。

304) 『日本国語大辞典』は、「天鴿船」を「天鳩船」と表記し、「(鳩のように速く走る船の意)「熊野の諸手船」の別名とされている船の名」と説明している(第一巻p.544)。

305) 小島他(1994)の口語訳(p.195)。

306) 『日本国語大辞典』は、「天磐船」を「(「磐(いわ)」は「堅固な」の意)①空中を飛行する堅固な船。「日本書紀」では、高天原から下界に降りる際に用いた船として伝えている。あめのいわふね」と説明している(第一巻p.541)。

307) 茂在寅男(1981)pp.60-62。引用の際の省略箇所は、……、で示す。以下同じ。

308) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986は、ama. n. Outrigger float; port hull of a double canoe, so called because it replaces the float、とする(p.22)。

309) 語源は、諸説あり、『広辞苑』第五版は「【temporas ^{ポルトガル}・天麩羅】(斎時の意。tempero(調味料)からともいう)」とする。天麩羅は、天婦羅とも書かれる。

外来語は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。日本語を例にとると、通信手段の発達した今日でさえ、全国的にレポートやリポートの揺れがある。関西でヘレと言う肉は、関東ではヒレと言うことが多いと聞く。また、一部のレストラン

では、フィレとも言っている。

問題の性質がやや異なるが、最近の例では、金正日氏の三男の漢字表記の問題が挙げられる。金正恩氏は、当初、「金正雲」と表記されていたが、「雲」はハングル表記の読音と対応しないことがわかり、「銀」か「恩」であろうとされた。中国語では、一時（2009年12月）、「金正恩」に変更し、その後は、「金正銀」と表記していた。この間、日本語では、漢字表記ではなく、「キム・ジョンウン」とカタカナ表記をしていたが、今は、漢字表記に戻している。なお、金正日氏も、一時期、金正一と表記されたことがあった。

310) 鳩は、ハトの総称と理解してもよく、「亀鳩」の略称と理解してもよい。

311) 茂在（1981）pp. 56-59。

312) 触覚情報に、アン・サリバンがヘレン・ケラーの手に字を書いたことや点字がある。

401) 古代の略称例は、船舶名称の場合、天磐船、石/磐船、石/磐、があり、最短の略称、石/磐、が最も好まれて使用されていた。

『万葉集』中には、292に石船（中西（1978）pp. 194-195）、4254に磐船（中西（1983）p. 257）がある。また、石と略された例は、29、1142、1287、1418、3025、3230。磐と略された例は50がある。

402) この水面は、海であれば海面、河川であれば川面、湖であれば湖面、である。

403) 阿倍仲麻呂がどこで詠んだのか、ははっきりしないが、左注には中国で詠んだとある。そうすると、以下のような解釈となる。

海一面に船（外洋航海船である天鳥船、天^{アマ}鳩船、天^{アマ}磐船）が浮かんでいる。（この船に乗って故国に帰れるのだなあ）（見上げて／ずっと先を／横を）見れば、故郷の春日の三笠山に出ているのと同じ月が上っていることだ。

天の意味を、外洋航海船と正しく捉えることにより、仲麻呂の見たものは、月だけではなく、故郷に繋がる海と、自分を故郷へ運ぶ船の三者であったことが、はっきりと見てとれるようになるのである。

日本への帰路、阿倍仲麻呂の乗った遣唐使船は、180人の人員を収容できる、当時の東アジアでは桁外れに大きな航洋船であった。その大型船は、仲麻呂に無事の帰国を想像させただろう。しかし、その船は遭難し、仲麻呂が故郷に繋がる東の海を渡ることがは遂になかった。

404) 天磐船の略称は、注401にあるように、磐船、磐、もあり、天、もある。時代差や地域差、さらには個人差により、好みに違いがあるようである。同じマクドナルドの略称でも、マックと言ったり、マクドと言ったりするようであるが、同様な理由によるのであろう。

405) 天足^{アマタラシ}は、普通名詞であるが、天皇の使用した天足は、敬意を持って、大御船、とも呼ばれた（『万葉集』151）。恐らく、旗艦（flag ship）であろう。

511) 注401参照。

521) 例外は、密林に住み外部とは全く言語交流をしたことのない場合だけである。

522) 籠神社の名称は、コノ神社、と、コノ神社、のどちらかに由来しているものと考えてよかろう。

前者であれば、コ（kau、船）の神社、の意であり、後者であれば、コノ（kau-nui、船-大きい、大型船）神社、の意である。

〔参考文献〕

〈日文〉

荻原浅男、鴻巣隼男1973。『古事記 上代歌謡（日本古典文学全集1）』小学館。

小沢正夫1971。『古今和歌集（日本古典文学全集7）』小学館。

角川日本地名大辞典 編纂委員会1990。『角川日本地名大辞典』角川書店。

小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀①（新編 日本古典文学全集2）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996。『万葉集④（新編 日本古典文学全集9）』小学館。

- 『大辭典』1994 (覆刻版。1936初版)。平凡社。
中西進1978。『万葉集 全訳注原文付 (一)』講談社。
中西進1980。『万葉集 全訳注原文付 (二)』講談社。
中西進1981。『万葉集 全訳注原文付 (三)』講談社。
中西進1983。『万葉集 全訳注原文付 (四)』講談社。
日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部2000、2001。『日本国語大辞典』(第二版 第一巻、第三巻、第十一巻) 小学館。
茂在寅男1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。
茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。
山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記 (新編 日本古典文学全集1)』小学館。

〈その他〉

- A. W. Reed & Timoti Kāretu, Ross Calman 2001. *The Reed Concise Māori DICTIONARY*, Literary Productions Ltd.
Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

【付記】本稿は、平成28年度佛教大学特別研究奨励費の助成による研究成果の一部である。

(こう とうじ 中国学科)

2016年11月15日受理